

論考 突線鈕1・2式銅鐸とその相互関係

難波 洋三

銅鐸の変遷の中で最大の画期は近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の成立であり、その歴史的意義を明確にするためには、成立直前にあたる突線鈕1・2式段階の銅鐸群の関係を解明する必要がある。本稿では、この突線鈕1・2式の銅鐸群について検討し、既発表の論考（難波1986・1991・2005・2006・2007・2011a・2018など）を補うこととする。

1. 佐原までの研究

後述する佐原分類が発表される1960年より前の研究状況を、まず概観しよう。

銅鐸の型式分類と編年を最初に公表したのは沼田頼輔で、鳥居龍蔵から教示されたヘーゲルの銅鼓研究に刺激を受け、大きさ・厚さ・絵画と文様・分布に着目して、銅鐸を第1～3種に分類した（沼田1913）。第1種は菱環鈕式～突線鈕1・2式、第2種は三遠式、第3種は近畿式に、ほぼあたる。近畿式銅鐸は大型で鈕に3個の大きな双頭渦文飾耳を有するなどの特徴により他の銅鐸との区別が容易であり、三遠式銅鐸は近畿式銅鐸と同じく大型であるが鈕に双頭渦文飾がなく、三河・遠江から集中的に出土する点でも目を引き、これも他の銅鐸との区別が容易であった。そして、第1種はその他の銅鐸である。

佐原分類に先行する銅鐸分類は大枠としてこの沼田分類を踏襲しており、さらに流水文銅鐸と袈裟襷文銅鐸を区別するとともに、沼田の第1種の中から横帯文銅鐸を抽出し、これを初原的な銅鐸と位置付ける方向へと展開する。

このように、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸は独自性の目立つ銅鐸として研究の初期段階から明確に認識・区別されていたが、それらが成立する経緯の分析は長く手付かずのままであった。沼田分類の第1種の銅鐸は、銅剣・銅矛・銅戈に比して大きさ・形態・装飾が多様であり、それを編年的にどのように整理するかの見通しが立たなかったことが、その主たる原因であった。佐原分類に先行する銅鐸の型式分類の多くは身の主文様に拘泥しており、細分はなされても編年的な有効性はあまりなかった。

2. 佐原の研究

この閉塞的な状況を打開したのが、佐原真による鈕のルジメント化に着目した分類と、それを基礎として展開した研究であった（佐原1960・1964ほか）。佐原の研究成果の全容をここで詳述はできないが、編年の大枠に関わる主要な成果は、梅原末治（梅原1923）・直良信夫（直良1930）・森本六爾（森本1930）らの研究で限定されつつあった初原的な銅鐸の候補の中から、菱環鈕式を最古段階の銅鐸として抽出する一方、直良を除くほとんどの研究者が最古式の銅鐸と考えていた福田型を、菱環鈕式よりも新しい地方的な銅鐸と位置付けたこと、多様な銅鐸からなる沼田の第1種のうち菱環鈕式を除く銅鐸を、外縁付鈕式・扁平鈕式・初期の突線鈕式に細分・編年したことなどである。

その中で、本稿との関係で特に重要となるのは初期の突線鈕式銅鐸である。佐原は、それまでの研究者のように単純に新段階の銅鐸すなわち近畿式・三遠式銅鐸とするのではなく、通常の文様の線や界線よりも目立って太い突線を使った銅鐸を新段階の銅鐸と定義することで、沼田分類では第1種に含まれていた銅鐸の中から近畿式・三遠式銅鐸の成立直前段階の銅鐸を抽出することに初めて成功した。これにより、近畿式・三遠式銅鐸の成立過程の解明がようやく可能となった。

3. 田中の研究

佐原以後のこの段階の銅鐸に関する研究の中で特に注目されるのは、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への変化を指摘した田中琢の研究である（田中1970）。田中は、佐原の分類・編年案を基礎として各型式の銅鐸の平均高をつないだ図（図1）を作成し、突線鈕2式以後、銅鐸が急激に巨大化すると考え、突線鈕1式以前の銅鐸を「聞く銅鐸」、突線鈕2式以後の銅鐸を「見る銅鐸」と命名し、この変化に伴って、銅鐸のまつりに大きな変動があったと考えた。ただし、田中の「見る銅鐸」すなわち近畿式・三遠式銅鐸ではなく、それ以外の突線鈕2式も含む点には注意が必要である。

前記のように、佐原以前の研究者たちは、銅鐸をまず近畿式・三遠式銅鐸とそれらより古い銅鐸に大別し

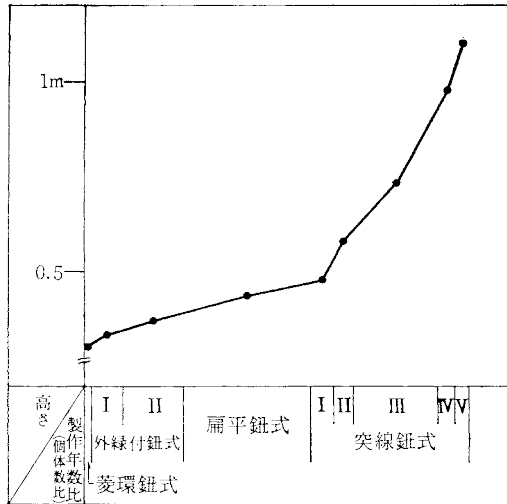


図1 銅鐸の大きさの変遷(田中1970)

た。これは、銅鐸の型式学的検討が深化していない研究初期においても近畿式銅鐸と三遠式銅鐸は特に目立つ銅鐸群で、他の銅鐸との区別が容易であったからである。田中の指摘は、初期の研究者によるこの直感的な分類に新たな視点から歴史的意義付けをおこない、これを復活・再生させたともいえる。

別稿で明らかにしたように、近畿式・三遠式銅鐸の成立は、確かに銅鐸の変遷過程の中で最大の画期である(難波 2005・2006・2007・2011a)。しかし、銅鐸の大型化の速度が突線鈕2式以後に急に早まったと考え、これをこの段階に画期を認める根拠とする田中の指摘には、問題がある。銅鐸の大型化の速度の変化を確認するためには、各型式の銅鐸の平均高とともに各型式の銅鐸の製作期間を知る必要がある。田中は型式に関係なく銅鐸の年間製作数は一貫してほぼ同じと推定し、各型式の製作期間をその型式の銅鐸の発見数に合わせて長短調整することで、この製作期間の問題の解決を試みた。

この点について詳しく検討しよう。田中は、当時の銅鐸の発見数は350個以上、中期に製作された外縁付鈕式、扁平鈕式、突線鈕1・2式はその7割弱、残る約3割は後期に製作された突線鈕3～5式であり、佐原の見解に依拠して、弥生時代中期を250年間、後期を100年間ほどとすると、中期から後期にかけて連続して似た規模で銅鐸の製作はなされたことになると考えた。すなわち、中期の銅鐸は $350 \text{ 個} \times 0.7 \div 250 \text{ 年} = 0.98 \text{ 個/年}$ 、後期の銅鐸は $350 \text{ 個} \times 0.3 \div 100 \text{ 年} = 1.05 \text{ 個/年}$ であり、一年あたりの既発見の銅鐸数はい

ずれもほぼ1となるので、この間、銅鐸の年間製作数は概ね変わらなかったと推定したのである。

当時の研究水準を考慮すれば、これは充分評価しうる仮説であり、以後、田中説が銅鐸研究に大きな影響を与えたことも肯首できる。しかし、その後、弥生時代の実年代観は著しく変化し、田中が採用した、弥生時代の中期を250年間、後期を100年間とする点についても、今では認め難いであろう。また、銅鐸群についての近年の研究成果を踏まえれば、扁平鈕式新段階には10以上の銅鐸製作工人集団が併存しており(難波 2011b)、これと単独あるいはごく限られた工人集団が製作した初期の銅鐸の、年間製作数が同じであったとは考えにくい。すなわち、中期の銅鐸の年間製作数が一貫して同じであったとする田中の仮定は、実態を反映していないと考えられる。

前記のように、田中自身は、当時としては合理的な論拠を示して銅鐸の年間製作数が一貫してほぼ同じであると推定し、それに基づいて銅鐸の大型化の速度が突線鈕2式以後に急に早まったと考えたのであるが、その後、田中説の前提条件が変化したにもかかわらず、この点については検討されることがなく、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へ変化したという結論が独り歩きするようになってしまった。問題は、田中にあるというよりは、田中説の結果のみを安易に採用し続けた、後続する研究者達の態度にあると言わざるをえない。

また、田中が算出した各型式の平均高についても、再検討が必要であろう。なぜなら、出土地が明確なあるいは推定できるすべての銅鐸について型式と全高などを記した「銅鐸出土地名表」を佐原が公表したのは1974年のことであり(佐原 1974)、田中が1970年以前に前記の論文を作成した際には、これをまだ利用できなかったからである(注1)。また、1974年の佐原の「銅鐸出土地名表」に含まれていない、100個以上ある出土地不明銅鐸をどのように取り扱ったのかも気になるところである。

その後、岩永省三は、難波の扁平鈕式の細分案を採用して田中のそれと同様の図を作成し、突線鈕2式以後に大型化の速度が速まったとは考えられず、この段階で銅鐸の性格が変化したとする田中の指摘は当たらないとした(岩永 1997)。田中とは異なり、岩永は各型式の製作期間を同じと仮定して図を作成している。しかし、前記の田中の仮定と同じく、岩永のこの仮定も

証明されたものではない。たとえば、140個余りと非常に個体数が多い扁平鈕式新段階の銅鐸と20個余りしかない突線鈕1式の銅鐸の製作期間が同じであったとするには、何らかの説明が必要であろう。また、将来、大型式が細分された場合、田中の図では大型式の製作期間に変化はないが、岩永の図では小型式への細分が進むと大型式の製作期間が長くなり、それが図の線の傾きに影響することになる。

すなわち、各型式の銅鐸の製作期間を明らかにすることは、現状ではほぼ不可能であり、銅鐸の大型化の速度の変化に着目して銅鐸の祭器としての性格の変化を論ずることは、方法的に問題があると言わざるをえない。近畿式・三遠式銅鐸の成立がどのような歴史的意味を持った出来事であったかを解明するためには、別の方法をとる必要がある。そして、最も有効であるのは、近畿式・三遠式銅鐸の成立前夜の銅鐸群の動向を詳細に検討して近畿式・三遠式銅鐸の成立過程を明確にするという、佐原が着手した方法の発展的継承であると私は考える（難波2011a）。

4. 佐原による突線鈕式の分類・編年案とその問題点

近畿式・三遠式銅鐸成立直前の銅鐸群の動向を検討するに先立って、佐原のこの段階の銅鐸の分類・編年案を検討しよう。

突線鈕式の大別

佐原は、突線鈕式を鈕が兜形か小判形かで新旧に大別し、鈕が兜形の古式を、突線を鈕・鱗の外周輪郭線や身の下辺横帯の界線にのみ用いる1式と、身の区画にも用いる2式に細分した（佐原1964）。この兜形・小判形の命名は坪井九馬三によるもので、鈕の輪郭の形状による定義であった（坪井1917）。佐原の兜形鈕と小判形鈕の定義は、坪井のそれとは異なる。具体的には、佐原は、1960年には鈕の高さが幅のほぼ3分の2あるいはそれ以下のものを兜形、鈕の高さが幅の値に近いものを小判形としているが（佐原1960）、1964年には幅10に対し高さが7未満のものを兜形、7以上のものを小判形とするか、あるいは鈕の高さが身の上端の幅よりも小さいものを兜形、身の上端の幅に一致するか、それ以上のものを小判形とすれば、ほぼ慣用に従うことになる、と記している（佐原1964）。従来の比定や実際の銅鐸のありようとの、

より高い整合性を求めた結果ではあろうが、佐原の兜形鈕と小判形鈕の定義は前後の論文で基準が異なっており、また、1964年の定義は分類基準が二種あるという変則的なものになってしまった。

この鈕の形態に基づく佐原の突線鈕式の大別で問題となるのは、①前記のように兜形鈕と小判形鈕の定義が不明確である、②鈕の兜形から小判形への変化は連続的である、③鈕が兜形のはずの突線鈕1・2式に鈕が小判形の例が多くある、以上である。最も問題となる③について説明しよう。佐原の1960年の定義に従えば、突線鈕1・2式のうち大福型（図2・3）のすべてと愛知県小島鐸を除く東海派（図13）の鈕は小判形であり、佐原の1964年の鈕高が鈕幅の70%以上を小判形とする定義に従えば、大福型は1個を除き、東海派は2個が、確実に小判形鈕となる。

このように、鈕の形態差を基準とする佐原の突線鈕式の大別には問題がある。よって、私は別の基準、すなわち外周突線が2条以下か3条以上かで、突線鈕式を新旧に大別している（難波1986）^{（注2）}。難波分類によれば、三遠式銅鐸のうち外周突線が2条の5個は突線鈕2式となる。すなわち、小判形鈕を有するので近畿式銅鐸より遅れて突線鈕3式で成立すると佐原が考えた三遠式銅鐸は、難波分類では近畿式銅鐸と同じ突線鈕2式で成立したことになる。

突線鈕1式と2式の製作時期の重複

近畿式・三遠式銅鐸の成立過程を検討する際により重要な問題となるのは、突線鈕1式と2式の製作時期の重複である。次に、この問題を検討しよう。

佐原は三遠式銅鐸の成立過程について、突線鈕1式の東海派（図13）と出土地不明笹野家旧蔵1号銅鐸（図5）のような軸突線を発達させた突線鈕2式の横帯分割型が統合して、三遠式銅鐸の前身となる突線鈕2式の福井県新町鐸や大阪府長柄鐸（図7）が生まれ、ついで突線鈕3式で三遠式銅鐸が成立すると説明した（佐原1979）。しかし、佐原が東海派と横帯分割型の統合後の銅鐸と位置付けた、福井県新町鐸や大阪府長柄鐸すなわち本稿の横帯分割型D2類には、三遠式銅鐸が東海派から受け継ぐ以下の特徴が見られない（難波1986・2011a）。

①三遠式銅鐸は東海派から鈕が小判形の特徴を受け継いだが、横帯分割型D2類は鈕が兜形である。

- ②三遠式銅鐸は東海派から鱗に3対の飾耳がある特徴を受け継いだ。横帯分割型D2類の福井県新町鐸は破損により鱗の飾耳数を確認できないが、大阪府長柄鐸の鱗には4対の飾耳がある。また、横帯分割型D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸(図6)も鱗に4対の飾耳がある。よって、福井県新町鐸も鱗に4対の飾耳があった可能性が高い。
- ③三遠式銅鐸と東海派は鈕に飾耳がない。横帯分割型D2類は鈕に飾耳がある。
- ④三遠式銅鐸と東海派は鱗の下端が身の下縁よりも上にある。横帯分割型D2類の鱗の下端は身の下縁と同じ位置にある。
- ⑤三遠式銅鐸と東海派には鈕の内縁に重弧文を飾る例が多い。横帯分割型D2類には鈕に重弧文を飾る例はない。
- ⑥三遠式銅鐸と東海派には鋸歯文RとLの交互配列が目立つ。横帯分割型D2類には鋸歯文RとLの交互配列はみられない。
- ⑦三遠式銅鐸と東海派は舞の型持孔の間隔が狭い。横帯分割型D2類の舞の型持孔の間隔は広い。
- ⑧三遠式銅鐸と東海派は、菱環に綾杉文を飾る場合は菱環の付け根に平行線を入れる。横帯分割型D2類にはこの平行線がない。
- ⑨三遠式銅鐸と東海派の下辺横帯鋸歯文はほぼ正三角形である。横帯分割型D2類の下辺横帯鋸歯文は細長い。

よって、私は、福井県新町鐸や大阪府長柄鐸は東海派との統合直前の横帯分割型の最新型式で、三遠式銅鐸はこれと東海派が統合して成立したと考える。

それでは、いかなる経緯で、佐原は三遠式銅鐸の成立過程を前記のように考えたのであろうか。佐原説では、三遠式銅鐸はすべて小判形鈕なので、突線鈕3式以後に成立したことになる。よって、突線鈕2式にさらに先立って作られたと佐原が考えていた突線鈕1式の東海派を、三遠式銅鐸の直接の祖型にすることには思い至らなかった、あるいは抵抗があったのであろう。しかし、私案のように、三遠式銅鐸は突線鈕1式の東海派と突線鈕2式の中でも新しい段階の横帯分割型が統合されて、突線鈕2式内で成立したと考えられる。すなわち、突線鈕1式の東海派の一部と突線鈕2式の中でも新しい段階の横帯分割型D2類の製作時期は、重複していたことになる。

このほか、突線鈕1式の徳島県源田1号鐸(図14)の身の下縁の幅の広い隆帯は、突線鈕2式の横帯分割型の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸(図6)の鈕と鱗の外周突線を身の下縁にまで延長した幅の広い突線に起源があるので、源田1号鐸も突線鈕2式の成立以後に作られた突線鈕1式となる(難波2007)。

また、佐原は一区流水文銅鐸の滋賀県大岩山1962年出土10号鐸を突線鈕1式とするが、この銅鐸は流水文を飾る点を除けば近畿式銅鐸そのものであり、近畿式銅鐸が成立する突線鈕2式以後に作られたと考えられる(難波1986)。これも、突線鈕2式以後に作られた突線鈕1式の1例である。

以上の検討により、突線鈕1式と2式の製作時期は、実際には大きく重複していたことが明確となった。よって、近畿式・三遠式銅鐸の成立直前の銅鐸の動向を解明するためには、突線鈕2式だけでなく突線鈕1式も一括して検討する必要がある。佐原が、三遠式銅鐸の成立過程の解明に向かい大きく歩を進めながらも、福井県新町鐸や大阪府長柄鐸の位置付けを誤ってしまった原因、そして近畿式銅鐸の成立過程の具体的な様相を三遠式銅鐸の場合のように明らかにできなかった主因は、氏の突線鈕式の細分・編年にこのような問題があったためであろう。

5. 突線鈕1・2式の銅鐸群

近畿式銅鐸と三遠式銅鐸を除くと突線鈕1・2式銅鐸の数は29個と少なく、銅鐸群と認定できるのは、大福型(6個)、迷路派流水文銅鐸A類(5個)、横帯分割型(5個)、石上型(3個)、東海派(7個)、以上の5群26個である。銅鐸群の数は扁平鈕式新段階末の10以上から半減しており、銅鐸群の統合、そして地域勢力の連合や統合がこの頃に進んだと推定できる。ただし、扁平鈕式新段階から引き続き、この時期になっても製作数や原料金属の使用量で突出した銅鐸製作工人集団はない。すなわち、銅鐸生産から見る限り、後期前葉頃、銅鐸分布圏内にはまとまった数の独自の銅鐸を作りうる有力な地域勢力が5程度あり、それらの力関係に明確な優劣はなかった、と推定できる(難波2005・2011a)。

次に各銅鐸群について説明する(難波2005・2007)。ただし、東海派の説明は別稿(難波2011b)に譲り、ここでは詳述しない。

大福型

大福型は、奈良県大福鐸、滋賀県大岩山1881年出土國學院大學蔵鐸（図3）、同大岩山1962年出土1・2号鐸（図2）、出土地不明ウースター美術館蔵鐸、出土地不明個人蔵鐸、以上の6個の存在を確認しており、出土地が判明しているあるいは推定できる4個のうち3個が滋賀県野洲市大岩山遺跡出土で、残る1個は奈良県桜井市大福遺跡出土である。そして、大岩山遺跡については、出土銅鐸24個のうち近畿式・三遠式銅鐸成立前に作られた3個がいずれも大福型であることが目を引く^(注3)。分布から見て、大福型は近畿でも東部に拠点を置く工人集団の製品と考えられ、大岩山遺跡出土銅鐸の構成を考慮すれば、現状では近江に拠点を置く工人集団の製品の可能性が高い。

大福型は、以下の特徴を有する。

- ①全高は46cm前後である。扁平鈕式新段階の正統派の六区袈裟襷文銅鐸のほとんどは全高42cm前後であり、大福型はこれらよりもひと回り大きい。
- ②身に六区袈裟襷文を飾る。
- ③袈裟襷文は横帯優先である。ただし、大岩山1962年出土2号鐸のみ、縦横帯の界線が切りあう。
- ④縦横帯の界線は単線である。
- ⑤後述する徳島県榎名鐸を除いて扁平鈕式新段階の正統派の六区袈裟襷文銅鐸にはない、第1横帯上界線がある。この、身の上縁の界線にあたる第1横帯上界線は単線であるが、大岩山1881年出土國學院大學蔵鐸のみこれが2条である。
- ⑥鈕にも鱗にも飾耳がない。
- ⑦鈕が小判形である。
- ⑧外周突線が2条で、細線を伴わない。ただし、大岩山1881年出土國學院大學蔵鐸のみ、外周突線が3条である。これは、この銅鐸の鈕の文様帯界線や身の上縁の界線の2条化と連動しているのであろう。
- ⑨舞の短径は長径のほぼ85～89%で、身の横断面が円形に近い。
- ⑩鱗の下端が身の下縁より上にある。
- ⑪舞の肩下がりがなく、舞がほぼ水平である。
- ⑫身の区画内・裾・突線などを鑄造後に研磨や切削で仕上げていない。
- ⑬裾の上下幅が広い。
- ⑭外縁第2文様帯には、頂角を菱環に向けた鋸歯文を飾る。

- ⑮鈕の文様帯界線が単線である。ただし、大岩山1881年出土國學院大學蔵鐸と大岩山1962年出土2号鐸は、これが2条である。
- ⑯菱環の綾杉文は、左半がC、右半がDで、菱環の付け根と頂に平行線がある。
- ⑰菱環は薄く、稜に線がある。
- ⑱内縁に菱環側を弦とした重弧文を飾る。ただし、大岩山1962年出土1号鐸B面は、菱環と内縁の界線を多条化して内縁に充填している。
- ⑲鈕孔が縦に細長い。
- ⑳鈕脚壁があり、ほとんどの例はこれに平行線を飾る。
- ㉑舞の型持は円形である。ただし、大岩山1962年出土2号鐸のみはこれが方形である。型持の間隔は東海派に比して大きい。
- ㉒身の上半の型持の多くは縦長の長方形で、一部はほぼ正方形である。また、身の上半の型持の多くは、上区の中位にある。
- ㉓裾の型持痕は方形で深い例が多い。
- ㉔下辺横帯下界線は突線4条であるが、大岩山1962年出土2号鐸のB面のみ3条である。下辺横帯下界線の突線も、外周突線と同じく細線を伴わない。大岩山1962年出土2号鐸は下辺横帯下界線の突線化が顕著でなく、他の界線と大差ない太さである。
- ㉕下辺横帯は上下幅が広く、鋸歯文が鱗鋸歯文に比して目立って大きい^(注4)。
- ㉖鋸歯文をRに統一した例と、鋸歯文Rと鋸歯文Lを併用した例がある。
- ㉗内面突帯はかなり高い位置にある。
- ㉘奈良県大福鐸は鱗下端の突線が身に著しくはみ出しており、出土地不明ウースター美術館蔵鐸も、この突線がややみ出しているようである。

大福型は横帯分割型や東海派に比して個体差が小さく、大きさもほぼ同じで、きわめて規格的な銅鐸であり、細分・編年は今のところ困難である。強いて言えば、鈕脚壁が無文である、身の上半の型持がほぼ正方形である、外周輪郭線や下辺横帯下界線の突線化が顕著でないといった古い特徴を残す大岩山1962年出土2号鐸を大福型の中でも古く位置付け、外周突線が3条、鈕の文様帯界線が2条、第1横帯の上界線が2条と、他の例よりもこれらが多条化した大岩山1881年出土國學院大學蔵鐸を、大福型の中でも新しく位置付けることができるかもしれない。



図2 滋賀県大岩山1962年出土2号鐸
突線鈕1式、大福型
全高47.2cm



図3 滋賀県大岩山1881年出土
國學院大學蔵鐸
突線鈕1式、大福型
全高47.5cm



図4 出土地不明明治大学3号鐸
突線鈕1式、横帯分割型C1類
全高41.0cm



図5 出土地不明笹野家旧蔵1号鐸
突線鈕2式、横帯分割型C2類
現高33.1cm



図6 出土地不明 国立歴史民俗博物館5号鐸
突線鈕2式、横帯分割型D1類
現高39.5cm

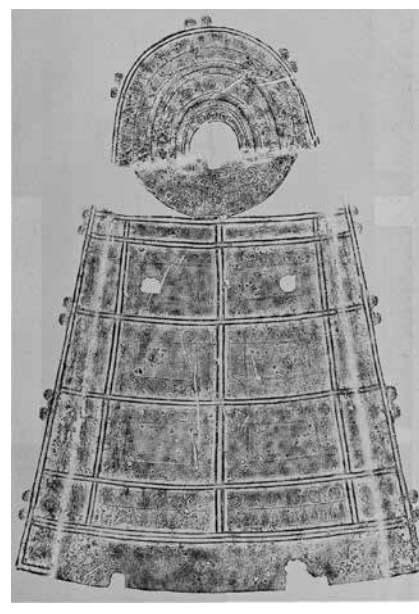


図7 大阪府長柄鐸
突線鈕2式、横帯分割型D2類
全高53.2cm



図8 鳥根県中野1号鐸
突線鈕1式、迷路派流水文銅鐸A1類
全高45.8cm



図9 岡山県妹鐸
突線鈕2式、迷路派流水文銅鐸A2類
全高48.3cm



図10 徳島県田村谷鐸
突線鈕2式、迷路派流水文銅鐸A2類
全高62.0cm

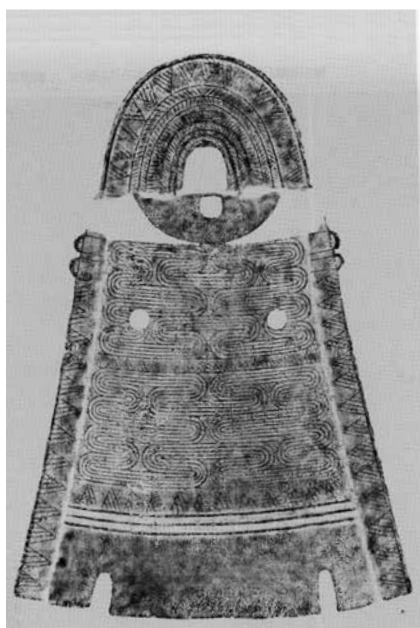


図11 奈良県石上1号鐸
突線鈕1式、石上型A類
全高60.0cm



図12 奈良県石上2号鐸
突線鈕1式、石上型B類
全高58.7cm



図13 出土地不明京都国立博物館蔵鐸
突線鈕1式、東海派C類
全高46.4cm



図14 徳島県源田1号鐸
突線鈕1式
全高 52.0cm



図15 岡山県草ヶ部鐸
突線鈕1式
全高 53.8cm



図16 伝和歌山県宇田森出土鐸
突線鈕2式
全高 58.6cm



図17 徳島県榎名鐸
扁平鈕式新段階
推定全高 45.8cm



図18 兵庫県生駒鐸
扁平鈕式新段階、横帯分割型B2類
推定全高 54.0cm



図19 伝兵庫県淡路川出土鐸
扁平鈕式新段階、東海派A1類
現高 46.9cm

扁平鈕式新段階末の、六区袈裟襷文銅鐸正統派2式の徳島県榎名鐸（図17）は、大福型の特徴の多く、具体的には、前記の①～⑥・⑨～⑱・⑳・㉔・㉕の特徴を有しており、大福型の直接の祖型とできる（難波2005・2007）。中でも、①・⑤・⑨・⑱・⑳・㉔・㉕は、他の扁平鈕式新段階の六区袈裟襷文銅鐸正統派にはほぼ見られない特徴である。なお、徳島県榎名鐸と大福型の重要な相違点の一つは、大福型には2条か3条の外周突線があるが、徳島県榎名鐸には外周突線がなく、輪郭線が細線1条の点である。また、榎名鐸の鈕孔が大福型のそれほど縦長になっていないことも、目を引く両者の相違点である。

横帯分割型

横帯分割型は、佐原の「渦巻派」（佐原1964）にはほぼあたり、扁平鈕式新段階の桜ヶ丘4・5号鐸型と同系列の、これを直接の祖型とする銅鐸群である。扁平鈕式新段階から突線鈕1・2式段階にかけて最も美しい銅鐸を作ったのがこの系列の工人集団で、文様構成が精緻だけでなく、突線鈕式になり他の銅鐸群では区画内や裾の研磨あるいは切削による仕上げが見られなくなるのに対し、横帯分割型だけは区画内と裾を鑄造後に研磨して仕上げしており、さらに新たに採用した突線までも丁寧に研磨している。

突線鈕式の横帯分割型を、外周突線がないC類と、外周突線があるD類に大別する。さらに、C類を、身の突線が横突線だけのC1類と、縦突線も加わったC2類に、D類を、身の突線の構成がC2類に類似するD1類と、三遠式銅鐸の多くと共通するD2類に細分する（難波2005・2007）。具体的には、出土地不明明治大学3号鐸（図4）がC1類、出土地不明笹野家旧蔵1号鐸（図5）がC2類、出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸（図6）がD1類、大阪府長柄鐸（図7）と福井県新町鐸がD2類である。C類は横突線が鱗を貫かないが、D類は横突線が鱗を貫く。また、C2類の鱗の飾耳は3対だが、D類はこれが4対である。扁平鈕式新段階も含めると、横帯分割型はA→B1→B2→C1→C2→D1→D2類と変化した。

佐原は、突線鈕式の横帯分割型が、出土地不明明治大学3号鐸（難波のC1類）→出土地不明笹野家旧蔵1号鐸（難波のC2類）→福井県新町鐸や大阪府長柄鐸（難波のD2類）と変化したと考えた（佐原

1964）。

この佐原の指摘後、新たに難波のD1類である出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸の存在が知られるようになった。春成秀爾は、この銅鐸を福井県新町鐸や大阪府長柄鐸と同じく出土地不明笹野家旧蔵1号鐸を祖型とするが、これらとは別系列の銅鐸と考えた（春成2009）。おそらく、春成は出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸の特異な文様構成や、横帯分割型としては例外的に鈕脚壁を有することを重視して、このように位置付けたのであろう。しかし、私は以下の点から、出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸を大阪府長柄鐸・福井県新町鐸と同系列の、それらに先行する銅鐸と考える（難波2005・2007）。

- ①D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸の身の突線の構成は、C2類の出土地不明笹野家旧蔵1号鐸のそれに似ており、縦突線が第1横帯の上半を貫いておらず、身の上縁には横突線がない。これに対し、D2類は、三遠式銅鐸の多くと同じく縦突線が第1横帯の上半を貫いており、身の上縁にも横突線がある。
- ②B・C類と同じくD1類には鱗の飾耳に脚（鱗を貫く平行線）があるが、D2類にはこれがない。D類になり外周突線によって飾耳の突出部と脚が分断されてしまい、それまでの飾耳の突出部と脚の一体性が損なわれた結果、次第に飾耳の脚を略するようになったのであろう。
- ③D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸とD2類の大阪府長柄鐸は、鱗に飾耳が4対あるという特異な特徴を持つ。D2類の福井県新町鐸は、破損しているため鱗の飾耳数を確定できないが、これもやはり4対であった可能性が高い。D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸では、上から2番目の飾耳が中区付近、上から3番目の飾耳が第4横帯付近にある。これは、鱗の飾耳がまだ3対しかない横帯分割型B類やC2類の飾耳の位置と同じである。そして、上から4番目すなわち一番下の飾耳は、鱗下端にある。横帯分割型C2類の出土地不明笹野家旧蔵1号鐸は鱗下端の平行線の多条化が顕著だが、おそらく、この平行線と飾耳の脚を同等視することから、製作工人はD1類で鱗下端にも飾耳を作ることを思いついたのであろう。これに対し、D2類の大阪府長柄鐸では、上から4番目すなわち一

番下の飾耳は下辺横帯付近にあり、2番目の飾耳は第2横帯付近、3番目の飾耳は第3横帯付近にある。4番目の飾耳を通常は3番目の飾耳を設ける位置に移動させた結果、2番目と3番目の飾耳の位置が上がってしまったと考えられる。このように、飾耳の位置についてD1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸は、D2類の大阪府長柄鐸よりも古い特徴を持っている。

- ④横帯分割型C2類の出土地不明笹野家旧蔵1号鐸は、身の側縁に縦方向の2条の細線があるが、D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸は、ほぼ同じ位置である鱗の付け根近くに細線が1条ある。D2類の2個には、この種の線がない。

なお、出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸(図6)の特異な特徴の一つは、身の下縁に通常の特異な突線を伴う幅の広い突線があり、これらの突線と下辺横帯下界線の突線で区画された裾を上下に三分割し、上と下の区画内に重弧文を飾る点である。身の下縁の通常の特異な突線を伴う幅の広い突線は、鈕や鱗から鱗下端へと続く2条の外周突線を、さらに身の下縁へと延長したものである。身の下縁にも突線を飾ることで、突線で囲まれた裾は袈裟襷文の区画と同等視されるようになり、その結果、通常は無文の裾にも区画内と似た文様を飾ることになったのであろう。後述する迷路派流水文銅鐸A2類の岡山県妹鐸(図9)の裾の類似の特徴は、突線の構成などとともに、出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸あるいはその類品のこの特徴を模倣したと考えられる。

横帯分割型は、規格的な大福型に比して個体差が非常に大きい。中でも、出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸と並んで特異な特徴が目立つのが、佐原が現存する突線鈕式の横帯分割型の中で最古に位置付けた出土地不明明治大学3号鐸(図4)である。次に、この銅鐸を検討しよう。

扁平鈕式新段階の横帯分割型で最も新しいB2類の兵庫県生駒鐸(図18)や、生駒鐸の中縦帯をさらに左右に分割した出土地不明重要美術品考古105鐸は、突線の有無を除けば、幅の広い鱗を内外2帯に分割する点、鱗に3対の飾耳がありその条数が非常に多い点、鱗下端の平行線の多条化が目立つ点、さらに錫濃度の高い青銅製である点も含め、C2類の出土地不明笹野家旧蔵1号鐸(図5)と非常に類似しており、これら

が同じ工人の製品である可能性も想定しうる。これに対し、出土地不明明治大学3号鐸は、①四区袈裟襷文銅鐸である、②鱗に飾耳がない、③鱗は幅が狭く内外に分割しない、といった、直前のB2類や後続するC2類とは異なる特徴を有する。私は、この銅鐸を「復古調の銅鐸」の一例と考えている。突線鈕1・2式の横帯分割型の中でも特異な前記の特徴は、おそらく横帯分割型の祖型である桜ヶ丘4・5号鐸型を模倣したのであろう(注5)。

横帯分割型は、扁平鈕式新段階の六区袈裟襷文銅鐸正統派の名東型や平形銅劍の最新型式に属する岡山県倉敷市瑜伽山1号銅劍と密接な関係があり、製作工人集団の拠点は、名東型の製作地である四国東部付近で、かつ、平形銅劍の分布域かその周辺にあたる地域にあったと推定できる。具体的には、瀬戸内東部が、横帯分割型銅鐸の製作工人集団の拠点の有力候補地である(難波2003b・2011a・2018)。

迷路派流水文銅鐸

突線鈕式の迷路派流水文銅鐸を、六区袈裟襷文銅鐸でない点を除けば近畿式銅鐸に比定しうる特徴を持つB類と、この特徴を持たないA類に大別する。さらに、A類を、一区流水文銅鐸のA1類(図8)と六区流水文銅鐸のA2類(図9・10)に、B類を、一区流水文銅鐸のB1類と三区流水文銅鐸のB2類に、細分する(難波1991)。

迷路派流水文銅鐸A1類の祖型は、扁平鈕式新段階末の高住型である。高住型の鳥取県高住鐸は、鑄造後に裾を鋭利な刃物で横方向に削って平滑に仕上げしており、隣り合う切削面の境には稜線がある。この加工にはキサゲ状の鋭利な鉄製工具を使用したと考えられ、同様の加工痕は、中広形銅矛の袋部や四国東部で作られた扁平鈕式新段階六区袈裟襷文銅鐸正統派名東型に属する徳島県名東鐸の裾や区画内にも見られる(注6)。迷路派流水文銅鐸では、突線鈕式になると、このような切削や研磨による裾の仕上げがなされなくなる。

B1類の滋賀県大岩山1962年出土10号鐸は近畿式銅鐸そのものであり、近畿式銅鐸成立段階で統合された工人集団の中に迷路派流水文銅鐸A類の工人集団が含まれており、統合後間もない頃には流水文銅鐸を作ることがあったことを示している(難波1991)。また、B類の中でも古い特徴を持つB1類が一区流水文銅鐸

なので、B1類の祖型はA1類と考えられる。

A1類は鳥根県中野1号鐸(図8)、出土地不明辰馬410鐸、出土地不明個人蔵鐸(田中琢編『鐸劍鏡』日本原始美術大系4 1977の図版42)、以上の3個が知られている。次の点から、3個は、鳥根県中野1号鐸→出土地不明辰馬410鐸→出土地不明個人蔵鐸の順に作られたと考える。

- ①全高は、鳥根県中野1号鐸が45.8cm、出土地不明辰馬410鐸が55.2cm、出土地不明個人蔵鐸が61.2cmで、この順に大きくなる。最小の中野1号鐸の全高は、祖型の高住型のそれに近い。
- ②鈕の頂とその左右および鱗の上中下位に飾耳があるが、鳥根県中野1号鐸は、すべての飾耳に脚がある。出土地不明辰馬410鐸は、鱗の飾耳には脚があるが鈕の飾耳には脚がない。出土地不明個人蔵鐸は、すべての飾耳に脚がない。前記の横帯分割型D類における外周突線導入後の変化と同じく、突線鈕式になり飾耳の突出部と脚が外周突線で分断されたため、次第に脚を省略するようになったと考えられる。
- ③鳥根県中野1号鐸と出土地不明辰馬410鐸は、下辺横帯の上界線が突線2条、下界線が突線3条である。出土地不明個人蔵鐸は下辺横帯下界線が突線4条で、A2類と共通する。
- ④鳥根県中野1号鐸と出土地不明辰馬410鐸は鈕孔が半円形で低く大きい、出土地不明個人蔵鐸はこれが小さくやや縦長である。
- ⑤鳥根県中野1号鐸と出土地不明辰馬410鐸は鋸歯文があまり細長くない、出土地不明個人蔵鐸は鋸歯文が極めて細長い。
- ⑥鳥根県中野1号鐸と出土地不明辰馬410鐸に比して、出土地不明個人蔵鐸は身が細長い。
- ⑦鳥根県中野1号鐸と出土地不明辰馬410鐸の鈕の飾耳は半円形飾耳で、出土地不明個人蔵鐸の鈕の飾耳は双頭渦文飾耳である。

なお、鳥根県中野1号鐸と出土地不明個人蔵鐸は、流水文の3列のx反転部の縦列のうち、左右の縦列のx反転部が同じ段にあるのに対し、出土地不明辰馬410鐸は、左右の縦列のx反転部が上下にずれた位置にあり、x反転部が左右対称の単純な配置になることを避けた複雑な構成である(難波1991)。

A2類はA1類を祖型とする。A2類の、身の流水文を6分割する縦横の突線は、横帯分割型C2類や

D類の身の突線と構成が似ている。横帯分割型では前記のように軸突線が発達する過程を確認できるのでに対し、迷路派流水文銅鐸では横帯分割型の完成した突線と類似した六区画構成の突線が突然見られるようになる。また、この突線は2条1組で横突線優先となり、流水文はこの突線によって六区画に分割されている。これらの点は、迷路派流水文銅鐸A2類の身の突線が、横帯分割型C2類やD類の突線を模倣したことを示している。

A2類の2個のうち、岡山県妹鐸(図9)には身の鱗近くにも縦突線があるが、徳島県田村谷鐸(図10)にはこの鱗近くの縦突線はない。岡山県妹鐸に、視覚的な効果あまり期待できないにも関わらず身の鱗近くに縦突線があるのは、横帯分割型の突線の構成をそのまま忠実に模倣したからであろう。よって、A2類の2個の中では、身の鱗近くの縦突線を略した徳島県田村谷鐸が岡山県妹鐸よりも後出と考える。田村谷鐸は鈕や鱗に飾耳がなく、鱗の上端にのみ飾耳の脚にあたる平行条線を確認できること、妹鐸では下辺横帯の下側の裾の上部に飾っていた連続渦文を下辺横帯内に飾るようになっていたこと、妹鐸は身の上縁の下に横帯があるが、田村谷鐸ではこの横帯を略していること、妹鐸よりも大型化していることなども、田村谷鐸が妹鐸よりも後出であることを示している。

次の点から、岡山県妹鐸には横帯分割型D1類の影響が顕著であり、迷路派流水文銅鐸A2類は横帯分割型D1類の影響を受けて成立したと考える。

- ①岡山県妹鐸には2条の外周突線があり身の横突線は鱗を貫く。この特徴は横帯分割型D類と共通する。
- ②前記のように、岡山県妹鐸の突線構成は横帯分割型D類のその模倣であるが、身の上縁に突線がない点は横帯分割型C2類やD1類と共通する。
- ③岡山県妹鐸と徳島県田村谷鐸は縦突線が下辺横帯を貫かない。横帯分割型C2とD2類は縦突線が下辺横帯を貫くが、D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸(図6)は縦突線が下辺横帯を貫かない点で、迷路派流水文銅鐸A2類の2個と共通する。
- ④岡山県妹鐸は横帯分割型C2類やD1類と同じく鱗の飾耳が鱗を貫く脚を伴うが、横帯分割型D2類は鱗の飾耳に脚がなくなっている。
- ⑤岡山県妹鐸の、身の下縁の幅の広い隆帯と、裾を上下に分割してその上半に連続渦文を飾る特徴は、前

記のように横帯分割型D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸(図6)にみられる類似の特徴を模倣したと考えられる。

次に、A1類とA2類の関係を検討しよう。

A1類の3個の中で最も新しい出土地不明個人蔵鐸とA2類を比較すると、A2類のほうが、鈕孔が半円形で大きく低く、身があまり細長くないといった古い特徴を持っている。また、A2類の岡山県妹鐸(図9)は、鱗の飾耳に脚がある点、鈕の飾耳が半円形である点、鋸歯文が極端に細長くない点でも、A1類の出土地不明個人蔵鐸よりも古い特徴を有している。よって、A2類は、A1類でも古い段階のものを祖型とし、A1類の新しいものと製作時期が重複しているのかもしれない。B1類の祖型がA2類ではなくA1類であることから、その可能性は考えられる。なお、B1類の滋賀県大岩山1962年出土10号鐸の下辺横帯の連続渦文は、A2類の徳島県田村谷鐸の下辺横帯の連続渦文や岡山県妹鐸の下辺横帯下の連続渦文と関係するのであろう。A1・A2・B1類の関係はこのように複雑であり、資料の増加を待って、さらに検討する必要がある。

前記のように、迷路派流水文銅鐸A2類と横帯分割型D類は身の突線の構成が類似しており、両者の密接な関係が推定できる。しかし、横帯分割型は区画内や裾だけでなく突線までも铸造後に丁寧に研磨して仕上げるのに対し、迷路派流水文銅鐸は突線や裾を铸造後に研磨や切削で仕上げない点、横帯分割型はD類で鱗飾耳が4対になるのに対し迷路派流水文銅鐸は鱗飾耳が3対である点、横帯分割型にはD1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸(図6)を除き鈕脚壁がないのに対し、迷路派流水文銅鐸はいずれも鈕脚壁を有する点、横帯分割型は文様帯と突線の間に細線があるが、迷路派流水文銅鐸は鱗の鋸歯文と外周突線の間や下辺横帯とその上下の突線の間、裾の連続渦文の横帯とその上の突線の間などに細線がない点(注7)などから、両者は別の工人集団の製品と判断できる。

5個の迷路派流水文銅鐸A類のうち出土地がわかるものは3個で、石見、備中、阿波から出土している。このように、現状では、迷路派流水文銅鐸A類の出土地は、銅鐸分布圏の西部に偏っている。突線鈕式の迷路派流水文銅鐸の祖型である扁平鈕式新段階末の高住型は1個しかみつかっていないが、これが因幡出土で

あること、そして、迷路派流水文銅鐸B2類が備中で出土していることも注目してよい。高住型の祖型の一つは扁平鈕式新段階の明石型で、扁平鈕式古段階の有本型さらに外縁付鈕2式の横型流水文銅鐸へと、その系列を遡ることができる(難波1991)。外縁付鈕2式の横型流水文銅鐸や扁平鈕式古段階の有本型は、それぞれの段階の最有力の銅鐸群であることや身を飾っている横型流水文の起源などから、畿内に製作工人集団の拠点があったと考えられるが、高住型が成立した頃にはこの系列の工人は銅鐸分布圏の西部に移動していたようである。

石上型

奈良県石上1号鐸(図11)、石上2号鐸(図12)とその同範銅鐸である推定奈良県出土辰馬406鐸の3個は、前者が鱗の上端のみに半円形飾耳を有するのに対し、後者は鈕と鱗に計9個の大きな双頭渦文飾耳を飾るなど、相違点が目立つが、①菱環が二重で内側の菱環は鈕孔に接する位置にある、②菱環は突出が明瞭で稜には線を入れない、③菱環の綾杉文はDCで頂と付け根に平行線がなく綾杉文の斜線の作る鋭角の角度が大きい、④下辺横帯下界線のみ突線でこれが3条である、⑤身の両面あるいは片面に反転部がC反転で条線が迷路化していない8c7x流水文を上下二区画に飾る、⑥鋸歯文内の斜線の方向はそろえない、⑦鱗下端に平行線を飾らない、⑧鱗下端と身の下縁が一致する、以上の特徴から、両者は同じ工人集団の製品と考える。これを石上型とし、鈕に飾耳がない奈良県石上1号鐸をA類、鈕と鱗に双頭渦文飾耳がある石上2号鐸とその同範銅鐸をB類とする。A類に比してB類は粗製で、流水文の条数も少ない(注8)。

A類の石上1号鐸(図11)は、斜格子文や鋸歯文の横帯で身を上下2区に分けて各区画内に8c7x流水文を飾る、裾の型持痕が縦に細長く頂部が円い、二重になった菱環だけでなく外縁第2文様帯にも綾杉文を飾り外縁第2文様帯から菱環にかけて複数帯の綾杉文を重ねたように見える(注9)、鱗の上端に1対の飾耳がある、といった特徴が兵庫県桜ヶ丘3号鐸などの外縁付鈕2式の横型流水文銅鐸と共通しており、全体のプロポーシオンもこれと似ている。石上1号鐸は、前記の横帯分割型C1類の出土地不明明治大学3号鐸(図4)と同じく「復古調の銅鐸」で、外縁付鈕2式

横型流水文銅鐸を模倣して作られたのであろう（難波1991・2005・2007）。

B類の石上2号鐸（図12）とその同範銅鐸は、鈕頂とその左右に、外縁第1文様帯を貫く4条か5条の平行線の脚を伴う双頭渦文飾耳があり、鱗にも左右それぞれ3個ずつ同様の双頭渦文飾耳がある。この特徴については、扁平鈕式新段階の渦森型B類（四区袈裟禪文銅鐸）や竹之内型（六区袈裟禪文銅鐸正統派2式）との関係が考えられる。ただし、これらの銅鐸群では鱗の飾耳は双頭渦文飾耳ではなく、半円形重弧文飾耳である。竹之内型の奈良県竹之内鐸は石上1・2号鐸と同じく天理市内で出土しているので、石上型B類の双頭渦文飾耳は竹之内型の特徴を受け継いだのかもしれない。

石上型は、3個のうち2個が奈良県出土で、残る1個も江戸時代の所蔵者が大和在住であったことがわかっている。奈良県出土の可能性が高い。よって、石上型は大和あるいはその周辺に拠点を置く工人集団の製品の可能性が高い（難波2005・2007・2011a）。

6. 突線鈕1・2式の銅鐸群の相互関係

以上の検討を踏まえ、次に、突線鈕1・2式段階の銅鐸群の相互関係を分析する。

近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が成立する直前に作られた5つの銅鐸群の中で、互いに共通する特徴が目立つのは、東海派（図13）と大福型（図2・3）、そして横帯分割型（図4～7）と迷路派流水文銅鐸A類（図8～10）、以上の2組である。

まず、東海派と大福型の関係を検討しよう。以下は、東海派と大福型の多くの銅鐸に見られる一方、他の銅鐸群にはほぼ見られない特徴である。

- ①鈕が縦長で小判形あるいはそれに近い。
- ②鈕孔が縦に細長い。
- ③内縁に菱環側を弦とする重弧文を飾る。
- ④鱗下端と身の下縁が一致せず、鱗が身の下縁より上で終る。

従来、東海派の銅鐸については特異性や独自性が強調されることが多かったが、このように大福型と類似点が多い。突線鈕式段階の東海派銅鐸の製作工人集団の拠点は東海地方にあり、前記のように、大福型の製作工人集団の拠点は近畿東部、中でも近江南部付近にあった可能性が現状では高い（難波2005・2007・

2011a）。弥生時代後期初頭の近江南部は土器についても東海地方と密接な関係があり（赤塚2002）、大福型と東海派が似ていることも大福型の製作地を前記のように近江南部とすれば理解しやすい。

次に、横帯分割型と迷路派流水文銅鐸A類の関係を検討する。両者の強い相互関係は、以下の特徴からうかがえる。

- ①迷路派流水文銅鐸A2類（図9・10）の突線構成は、横帯分割型D1類（図6）を模倣している。
- ②横帯分割型D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸（図6）は、裾を上下3区に分け、その上と下の横帯に重弧文を飾る。迷路派流水文銅鐸A2類の岡山県妹鐸（図9）の裾の類似の特徴は、これを模倣したものである。
- ③鈕は兜形で、鈕孔は半円形である。
- ④外縁第2文様帯に連続渦文を飾る例がある。
- ⑤横帯分割型D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸と迷路派流水文銅鐸A2類の徳島県田村谷鐸（図10）は、鈕脚壁に綾杉文を飾る。

以上は、突線鈕1・2式の銅鐸群のうち、この2群に限って見られる特徴である。以下も、この2群に共通して見られる特徴であるが、同時期の他の銅鐸群にもこれらの特徴を有する例がある。

- ⑥鱗下端と身の下縁が一致する。
- ⑦鈕に3個の飾耳を有する例がある。
- ⑧鱗に半円形飾耳を3対あるいは4対有する例がほとんどである。
- ⑨横帯分割型D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸では、鈕と鱗の外周突線を身の下縁まで延長しており、ここにも2条の突線がある。この2条のうち下の突線は、幅が通常より広い。前記のように、迷路派流水文銅鐸A2類の岡山県妹鐸の鱗下端から身の下縁へと続く幅の広い隆帯は、出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸の鱗下端から身の下縁へと続くこの幅の広い突線を模倣したと考えられる。後述するように、徳島県源田1号鐸の身の下縁にも、類似の幅の広い隆帯がある。

このほか、迷路派流水文銅鐸A2類の岡山県妹鐸における連続渦文の多用も、扁平鈕式以来これを鈕や横帯に好んで飾る横帯分割型の影響を受けた可能性がある。一方、横帯分割型が鈕頂とその左右の3か所に飾耳を持つようになることや、C2類では扁平で厚さが

均一であった横帯分型の飾耳がD類になって端ほど薄くなる形態に変化することについては、迷路派流水文銅鐸A類の影響を受けた可能性がある。

このように、横帯分割型と迷路派流水文銅鐸A類には類似点が多くあり、①②⑨から、迷路派流水文銅鐸A2類は横帯分割型D1類の影響を受けて成立したと考える。

東海派と大福型、横帯分割型と迷路派流水文銅鐸A類の2組と対極的なのが石上型(図11・12)で、他の4つの銅鐸群と共通する特徴は少なく、独自性が強い。前記のように石上型の製作工人集団の拠点は和歌山県宇田森にあり、和歌山県宇田森出土鐸の3個ある。和歌山県宇田森出土鐸の3個ある。

近畿式銅鐸は大福型と迷路派流水文銅鐸A類が中心となって成立し、三遠式銅鐸は東海派と横帯分割型が関係して成立する(難波2005・2007・2011a)。しかし、大福型と東海派の間や横帯分割型と迷路派流水文銅鐸A類の間や東海派と横帯分割型の間には類似点は少なく、近畿式銅鐸・三遠式銅鐸の成立前にはあまり強い相互関係はなかったようである。ただし、次の点は、三遠式銅鐸の成立前にすでに、東海派と横帯分割型の間には何らかの相互関係があったことを示しているのかもしれない。

- ①この2群は、突線が細線を伴う。ただし、東海派の下辺横帯下界線の突線は、静岡県田嶺鐸を除いて細線を伴わない。
- ②東海派D類の菱環の外界線は、突線2条と細線1条からなる。福井県新町鐸の菱環の外界線は突線2条とその内外の細線からなっており、東海派D類のそれと類似する。この特徴は、東海派B類の愛知県朝日鐸の、突線1条と細線を組み合わせて菱環の内外の界線とする特徴に起源があるのかもしれない。

最後に、銅鐸群をなさない同時期の銅鐸とこれらの銅鐸群の関係も検討しておこう。

近畿式銅鐸と三遠式銅鐸を除く突線鈕1・2式には、以上の五つの銅鐸群に属さず、今のところ類例が他にない銅鐸が、徳島県源田1号鐸、岡山県草ヶ部鐸、伝

和歌山県宇田森出土鐸の3個ある。

徳島県源田1号鐸(図14)は、鑄造後に区画内・裾のみならず突線までも丁寧研磨する、突線が細線を伴う、下辺横帯下界線の突線が3条であるなど、横帯分割型と類似する特徴を多く持っている。また、源田1号鐸は、身の側縁に縦の細線が2条あるが、類似の細線は、横帯分割型C2類の出土地不明笹野家旧蔵1号鐸(身の側縁に縦の細線が2条)(図5)と横帯分割型D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸(鱗の付け根に縦の細線が1条)(図6)にもある。さらに、身の下縁の幅の広い隆帯は源田1号鐸と迷路派流水文銅鐸A2類の岡山県妹鐸(図9)にみられるが、これらは、前記のように、横帯分割型D1類の出土地不明国立歴史民俗博物館5号鐸の身の下縁の幅の広い突線に起源がある。このように、横帯分割型と関係が深い源田1号鐸の出土地が徳島県であることは、横帯分割型の製作工人集団の拠点が吉備を含む瀬戸内東部にあったとする前記の推定に有利である。

岡山県草ヶ部鐸(図15)は、飾耳の数と形態、身の下縁と鱗の下端が一致する、鈕脚壁がある、突線が細線を伴わない、区画内・裾・突線を鑄造後に研磨や切削で仕上げないなどの特徴から、迷路派流水文銅鐸A類と密接な関係があることがわかる。ただし、外周突線が1条で六区袈裟襷文銅鐸である点が迷路派流水文銅鐸A類と異なっており、迷路派流水文銅鐸A類の製作工人集団と近い関係にある別の工人集団の製品であろう。

伝和歌山県宇田森出土鐸(図16)は、以下の特徴を有する。

- ①鈕が兜形である。
- ②菱環の内外斜面は匙面状で稜が突出しており、綾杉文ⅢDⅢCⅢを飾る。
- ③鈕脚壁がある。
- ④舞の短径は長径の83.5%で、舞が円形に近い。
- ⑤舞は肩下がりがなく、ほぼ水平である。
- ⑥鈕頂とその左右に計3個の双頭渦文飾耳がある。飾耳の双頭渦文は2条の線を絡める古い特徴を有し、渦巻部は単線で連結部のみ複線とする近畿式銅鐸の双頭渦文飾耳とは特徴が異なる。扁平鈕式古段階の有本型B類、扁平鈕式新段階の渦森型・竹之内型、突線鈕1式の石上型B類が、類似の双頭渦文飾耳を有する。また、双頭渦文飾耳には脚がない。

- ⑦ 鱗には3対の半円形重弧文飾耳がある。飾耳は板状で脚がない。
- ⑧ 鱗の下端と身の下縁はほぼ一致する。
- ⑨ 鱗の下端はほぼ水平である。
- ⑩ 鱗の下端に3条の平行な細線を飾る。
- ⑪ 身の主文様は四区袈裟襷文である。
- ⑫ 袈裟襷文の縦横帯の2条1組の界線は突線である。すなわち区画突線を有するが、第1～3横帯は区画突線が細線を伴う。また、下辺横帯下界線は突線3条である。
- ⑬ 第1横帯には突線の上界線がある。
- ⑭ 左右の縦帯は鱗との間にも2条の区画突線がある。
- ⑮ 鋸歯文は細長く、Rに統一する。
- ⑯ 区画内や裾を鑄造後に研磨や切削で仕上げない。
- ⑰ 身の上半の型持が長方形で、舞の型持が円形である。
- ⑱ 外周突線は2条である。
- ⑲ 内面突帯は高い位置にある。
- ⑳ 全高58.6cmと、近畿式・三遠式銅鐸以外の突線鈕2式の銅鐸の中でも大型である。
- ㉑ 身の反りが強い。

伝和歌山県宇田森出土鐸は、突線鈕2式の中で、近畿式銅鐸と同じく袈裟襷文の縦横帯界線をすべて突線化した唯一の銅鐸であり、全体として近畿式銅鐸との類似点が目立つ。近畿式銅鐸との関係については類例の増加を待って検討したい。なお、鉛同位体比は、A式図でa領域のやや外に位置しており（東京国立博物館編2005）、この点は近畿式・三遠式銅鐸成立前の銅鐸と共通する。

7. 突線の成立過程

以上の分析結果を踏まえ、次に各種の突線の成立過程を検討しよう。

菱環鈕2式の出土地不明辰馬402鐸や出土地不明明治大学5号鐸などは、縦横帯の界線を斜格子文や鋸歯文の線よりもやや太く、そして高く強調しており、この特徴はその後に作られた銅鐸にも普遍的にみられる。また、同様の刻線の太さの使い分けは、佐賀県鳥栖市本行遺跡出土の銅鐸の石製鑄型においても確認できる（難波2011b）。

扁平鈕式新段階になると、出土地不明辰馬434鐸（六区袈裟襷文銅鐸正統派1b類）、鳥根県加茂岩倉20号鐸（六区袈裟襷文銅鐸正統派2類、加茂岩倉8号鐸

型）、大阪府信達鐸（東海派A1類）、伝兵庫淡路川出土鐸（東海派A1類）（図19）、鳥根県加茂岩倉18・23・35号鐸（加茂岩倉35号鐸型）、徳島県長者ヶ原1号鐸（長者ヶ原型）など、下辺横帯下界線が他の線よりも太く高い例が増加する（注10）。この特徴を持つ銅鐸には出土地不明辰馬434鐸のように扁平鈕式新段階の中頃に製作が遡るものもあるが、そのほとんどは扁平鈕式新段階末に属する。また、扁平鈕式新段階末のこの特徴を有する銅鐸が、特定の銅鐸群だけでなく多くの銅鐸群に存在することも注目できよう。

すなわち、扁平鈕式新段階の中頃になり、下辺横帯下界線を他の界線や文様の線よりもかなり太くした例が現れ、扁平鈕式新段階末になると、この特徴は多くの銅鐸群に見られるようになる。この傾向がさらに顕著となり、突線は生み出されたのであろう（注11）。

このように、銅鐸の描線でまず突線化したのは下辺横帯下界線であり、外周突線・軸突線・区画突線などの出現は、それよりも遅れる。

（軸突線の成立）

軸突線が成立する過程は、佐原がすでに明らかにしている（佐原1960・1964）。これを踏まえて、横帯分割型で軸突線が発達する過程を概観すると、次のようになる。

軸突線を飾る最古の銅鐸は、横帯分割型C1類の出土地不明明治大学3号鐸（図4）である。前記のように、突線化はまず下辺横帯下界線で始まる。出土地不明明治大学3号鐸では、下辺横帯下界線は3条の突線であるが、同様の横突線2条を、身の上縁にも飾るとともに、横帯分割型の上下に二分された横帯のうち、下辺横帯下界線と身の上縁の突線のほぼ中間に位置する第2横帯の中央にも挿入しており、これによって軸突線が成立した。なお、軸突線と文様帯の間の細線は、佐原が指摘したように横帯を上下に分割する2条の界線の名残りである。

C2類の出土地不明笹野家旧蔵1号鐸（図5）になると袈裟襷文の横帯だけでなく中縦帯にも軸突線を飾るようになり、併せて左右の縦帯の区画界線も突線2条とする。横帯分割型C類に先行して、B1類の香川県大麻山鐸やB2類の出土地不明重美考古105鐸のように袈裟襷文の縦帯も左右に分割する例があることが、縦帯にも軸突線を採用する一因となったのであ

う。また、この出土不明笹野家旧蔵1号鐸、さらにはこれに後続するD類、三遠式銅鐸では、横軸突線が縦突線を切っており横軸突線優先となっている。これは、縦突線が横軸突線よりも遅れて出現するという前記の突線構成の複雑化の経緯を反映している。

この横帯分割型C類(図4・5)では、まだ銅鐸の輪郭線は突線ではない。すなわち、横帯分割型では、軸突線よりも遅れて外周突線が出現する。横帯分割型が外周突線を採用するのは次のD1類(図6)の段階である。そして、外周突線の採用と連動して、身の横の突線は鱗を貫くようになる。これは、外周突線と横の突線が繋がらずに分離した状態だと不自然なので、横の突線を伸ばして外周突線と繋げることで、両者の一体化を図ったのであろう。

(外周突線の成立)

外周突線が、どの銅鐸群でまず使用されるようになったのかは明確でない。突線鈕1・2式で外周突線が1条の例はわずかで、多くはこれが2条である(注12)。具体的には、迷路派流水文銅鐸と前記の1個を除く大福型は外周突線が2条であり、横帯分割型と東海派は当初は外周突線がなかったが、その後、2条の外周突線を有するようになる。

外周突線が、大福型・迷路派流水文銅鐸・東海派のいずれかで成立し、横帯分割型はそれを採用したとすると、大福型・迷路派流水文銅鐸・東海派の外周突線が採用当初から2条であり1条ではないことを、これらの銅鐸群の変遷過程の中で説明することは、現状では困難である。

これに対し、横帯分割型で、袈裟襷文に伴う軸突線が2条であるのに合わせて2条の外周突線が成立し、横帯分割型で成立したこの2条の外周突線を他の銅鐸群が模倣した可能性はある。この場合、成立当初から2条の外周突線を有する突線鈕1式の大福型・迷路派流水文銅鐸A類・東海派C類は、突線鈕2式の横帯分割型D1類の成立後に出現したことになる。

しかし、問題となるのは次の点である。前記のように、迷路派流水文銅鐸A2類の中でも古い特徴を有する岡山県妹鐸は横帯分割型D1類の影響を受けており、その製作は横帯分割型D1類の成立後と考えられる。一方で、外周突線が2条である迷路派流水文銅鐸A1類の成立もやはり横帯分割型D1類の成立後にな

ると、迷路派流水文銅鐸A1類とA2類の一部がかなり短期間で作られた可能性が高くなるが、この説明にはやや無理がある。より単純に、前記のいずれかの銅鐸群で外周突線を使用し始める際にこれを2条にしたにすぎないのかもしれない。この場合も、各銅鐸群の外周突線が基本的に2条であるので、この特徴について相互の影響関係があったと推定できるであろう。

以上のように、突線鈕1・2式の2条の外周突線の出現過程については、現状ではまだ明確でない。今後、さらに検討を深めたい。

近畿式銅鐸を除く突線鈕1・2式段階の銅鐸で、近畿式銅鐸のように袈裟襷文の縦横帯界線をすべて突線とするのは、伝和歌山県宇田森出土鐸のみである。また、この銅鐸は下辺横帯下界線が突線化しており、2条の外周突線も有する。横帯分割型C2・D類の左右縦帯に伴う縦突線を、中縦帯軸突線と同等の性格が強いと考え、通常の区画突線と区別して扱うなら、袈裟襷文の界線を突線化した区画突線の出現は、前記の各種の突線よりもさらに遅れることになる。

以上の検討を要約すると、突線は、下辺横帯下界線の突線→軸突線・外周突線→区画突線の順で出現し、前記のように軸突線と外周突線では軸突線が先に出現した可能性がある。よって、近畿式・三遠式銅鐸を除く突線鈕1・2式を、外周突線のない1類、外周突線があるが区画突線はない2類、外周突線と区画突線のある3類に分けることが可能である。1類は東海派B類と横帯分割型C類および石上型、3類は伝和歌山県宇田森出土鐸、その他は2類となる。前記のように、近畿式・三遠式銅鐸を除く突線鈕1・2式は、全体として1類→2類→3類の順に出現したと考えられるが、この類別は製作時期の新旧を単純に示しているのではなく、実際には1～3類の製作時期は大きく重複しているであろう。また、3類の伝和歌山県宇田森出土鐸については、近畿式銅鐸成立後に作られた可能性も、今後慎重に検討する必要がある。

なお、本稿で検討した突線鈕1・2式段階の銅鐸から近畿式・三遠式銅鐸が成立する具体的なありさまについては、別稿(難波2011a)で詳述した。これも併せて参照していただければ幸いである。

(注)

- 1 田中が佐原から公表前の「銅鐸出土地名表」の提供を受け、それに基き各型式の平均高を算出した可能性もある。ただし、1974年発表の「銅鐸出土地名表」には誤植や型式の誤比定が多いので、この場合も提供を受けた「銅鐸出土地名表」がどの程度の完成度のものであったかが問題となる。
- 2 大福型の滋賀県大岩山1881年出土國學院大学蔵鐸(図3)は、突線鈕1・2式の中で例外的に外周突線が3条である。
- 3 前記のように、佐原は大岩山1962年出土10号鐸を突線鈕1式、すなわち近畿式銅鐸成立前の銅鐸とするが、これは近畿式銅鐸の一種である。
- 4 扁平鈕式新段階の銅鐸で、下辺横帯の鋸歯文が下辺横帯に接する位置の鋸歯文よりも目立って大きい例は少ない。突線鈕2式の近畿式銅鐸は14個中10個が大福型と共通するこの特徴を有しており、近畿式銅鐸はこの特徴を大福型から受け継いだと考えられる。
- 5 桜ヶ丘4・5号鐸型自体も、菱環鈕式や外縁付鈕1式を模倣して扁平鈕式新段階に製作された「復古調の銅鐸」であり、同様の「復古調の銅鐸」としては、ほかに外縁付鈕2式横型流水文銅鐸を模倣して作られた突線鈕1式の奈良県石上1号鐸(図11)などがある。また、突線鈕1式の東海派C類のうち、唯一流水文を身の主文様とする伝兵庫県淡路出土辰馬409鐸は、外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸を模倣したと考えられる「復古調の銅鐸」である。
- 6 銅鐸の身の下縁端面や飾耳の輪郭などの仕上げに鉄製工具が多用されるようになるのは、外縁付鈕2式以後である(難波2003a)。外縁付鈕1式末以後、銅・鉛などの原料金属を朝鮮半島経由で中国から輸入するようになり、同じルートを通じて良質の鉄器の入手が容易となったことが関係しているであろう(難波ほか2015)。銅鐸で補刻が始まるのもこの頃であり、鉄製工具は補刻にも使われたと考えられる(難波1997・2003a)。
- 7 ただし、迷路派流水文銅鐸A2類の徳島県田村谷鐸の鈕の外周突線は、細線を伴っている。
- 8 出土地不明ジェノバ市立美術館蔵鐸は石上2号鐸(図12)とその同範銅鐸に似ているが、下区の流水文が閉じた型になっていないなど、流水文の型や描

線に崩れが著しく、写真からは真贋の判断が付きかねるので今回の検討からは除外する。

- 9 身の流水文間の横帯に斜格子文を飾る面の鈕の外縁第2文様帯内半の文様は、不鮮明であるが、鋸歯文の可能性もある。
- 10 扁平鈕式新段階の四区袈裟摺文銅鐸樸本型の出土地不明辰馬423鐸の下辺横帯下界線も突線状に見えるが、これは鑄造後に研ぎ凹めて幅のある沈線を作るとともに裾側を切削して段を作ること、沈線間があたかも突線のように見えるように仕上げたものである。また、扁平鈕式新段階初期に位置付けうる桜ヶ丘4・5号鐸型のうち、兵庫県桜ヶ丘5号鐸は鱗下端の線のみが非常に太く突線状であるが、類似の特徴を有する例は扁平鈕式には他にない。
- 11 通常界線と突線を、太さや高さで明確に区別することは実際には困難である。将来的には扁平鈕式新段階と近畿式・三遠式銅鐸成立前の突線鈕1・2式をまとめてとりあつかうことも検討する必要があるが、現状では扁平鈕式新段階に含めるか突線鈕式とするかは、銅鐸群あるいは類ごとに検討すべきであろう。たとえば、加茂岩倉35号鐸型では、鳥根県加茂岩倉23号鐸は下辺横帯下界線が縦横帯界線よりやや太い程度で突線化が顕著でないが、加茂岩倉18・35号鐸は下辺横帯下界線が縦横帯界線に比してかなり太い。発見当初は、この加茂岩倉35号鐸型を扁平鈕式新段階～突線鈕1式に比定していたが(難波1997)、現在は扁平鈕式新段階に含めている(難波2011b)。また、突線鈕1式の大福型は鈕と鱗の外周線と下辺横帯下界線が突線であるが、滋賀県大岩山1962年出土2号鐸(図2)では、これらの線の太さは文様帯界線よりもやや太い程度である。
- 12 突線鈕1・2式で外周突線が1条の例は、徳島県源田1号鐸と岡山県草ヶ部鐸の2個である。前記のように、源田1号鐸は横帯分割型D1類の影響を受けているので、外周突線が2条の銅鐸の出現後に製作されたと考えられる。よって、外周突線が2条の銅鐸に先行して作られた可能性がある外周突線1条の銅鐸は、草ヶ部鐸のみである。

(参考文献)

赤塚次郎 2002 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」

- 『八王子遺跡』考察編
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集
愛知県埋蔵文化財センター
岩永省三 1997『金属器登場』歴史発掘7 講談社
梅原末治 1923「淡路出土の一遺品を記して銅鐸の形式分類に及ぶ」『芸文』第14年第12号
佐原真 1960「銅鐸の鋳造」
『世界考古学大系』第2巻 日本Ⅱ 弥生時代 平凡社
佐原真 1964「銅鐸」『日本原始美術』4 青銅器 講談社
佐原真 1974「銅鐸出土地名表」
『古代史発掘』5 大陸文化と青銅器 講談社
佐原真 1979『銅鐸』日本の原始美術7 講談社
佐原真・春成秀爾 1982「銅鐸出土地名表」
『考古学ジャーナル』No.210
進藤武 1995「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」
『古代文化』第47巻第10号
田中琢 1970「「まつり」から「まつりごと」へ」
『古代の日本』第5巻 近畿 角川書店
坪井九馬三 1917「銅鐸の測定法に就て」
『考古学雑誌』第7巻第9号
東京国立博物館編 2005『東京国立博物館図版目録 弥生遺物篇（金属器）増補改訂』
直良信夫 1930「横帯文式の銅鐸」
『歴史地理』第56巻第1・2号
難波洋三 1986「銅鐸」
『弥生文化の研究』第6巻 道具と技術Ⅱ 雄山閣出版
難波洋三 1991「同範銅鐸2例」
『辰馬考古資料館考古学研究紀要』2 辰馬考古資料館
難波洋三 1997「出土銅鐸の概要」
『加茂岩倉遺跡発掘調査概報』Ⅰ 加茂町教育委員会
難波洋三 2003a「井向1号銅鐸の位置づけ」
『辰馬考古資料館考古学研究紀要』5 辰馬考古資料館
難波洋三 2003b「徳島市出土の特徴的な銅鐸について - 亀山型と名東型 -」
『徳島市立考古資料館開館5周年記念シンポジウム 銅鐸の謎をさぐる』徳島市立考古資料館
難波洋三 2005「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸 - 最終段階の銅鐸の動向 -」
『平成17年度文化財講座資料集 魏志倭人伝の世界』大阪府文化財センター
難波洋三 2006「近畿式・三遠式銅鐸の成立」
『歴博国際シンポジウム2006 古代アジアの青銅器文化と社会 - 起源・年代・系譜・流通・儀礼 - 発表要旨集』国立歴史民俗博物館
難波洋三 2007「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸 - その成立と展開 -」
『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』平成15年度～18年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書
難波洋三 2011a「扁平鈕式以後の銅鐸」
『大岩山銅鐸から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館平成23年度春季特別展図録 滋賀県立安土城考古博物館
難波洋三 2011b「銅鐸群の変遷」
『豊饒をもたらす響き 銅鐸』大阪府立弥生文化博物館図録45 大阪府立弥生文化博物館
難波洋三 2018「出土地不明笹野家旧蔵一号鐸と横帯分割型銅鐸」
『学叢』第40号 京都国立博物館
難波洋三・篠宮正・高妻洋成 2015「兵庫県加古川市望塚出土銅鐸の研究」
『兵庫県立考古博物館研究紀要』第8号 兵庫県立考古博物館
沼田頼輔 1913「銅鐸考」『考古学雑誌』第3巻第10号
春成秀爾 2009「第1部 弥生青銅器コレクション概説」
『弥生青銅器コレクション』国立歴史民俗博物館資料図録6 国立歴史民俗博物館
森本六爾 1930「銅鐸の型式分類と播磨神種例の占むる位置」
『人類学雑誌』第45巻第10号
(難波論文図表リスト)
図1 田中 1970 から転載
図2 滋賀県 提供 (滋賀県蔵)
図3 野洲市歴史民俗博物館 (写真は複製品)
図4 明治大学博物館 提供 (明治大学博物館蔵)
図5 難波 2018 から転載
図6・18 国立歴史民俗博物館 提供 (国立歴史民俗博物館蔵)
図7・11 鳥根県立古代出雲歴史博物館蔵 (三木文雄資料) 三木文雄 1995『日本出土青銅器の研究』図録編 第一書房から転載
図8・9・14～16 Image:TNM Image Archives 提供 (東京国立博物館蔵)
図10 徳島県立博物館 2006『徳島の銅鐸』から転載 (国(文化庁保管))
図12・19 財団法人 辰馬考古資料館 提供 (財団法人 辰馬考古資料館蔵)
図13 京都国立博物館 提供 (京都国立博物館蔵)
図17 菅原康夫・藤川智之・植地岳彦 2011「三好市西祖谷山村 榎鈴神社所蔵の銅鐸 - 榎銅鐸」
『徳島県埋蔵文化財センター紀要 真朱』第9号 徳島県埋蔵文化財センターから転載

引用・参考文献

- 赤塚次郎 2004「東日本からの青銅器論」
『考古学フォーラム』16
- 浅田博造 2020「付編3 神領銅鐸出土地について（覚書）」
『神領第一号墳』春日井市教育委員会
- 石橋茂登 2004「東海地方の突線鈕式銅鐸について」
『かにかくに』八賀晋先生古希記念論文集
- 井上洋一 2003「第1章 銅鐸」『考古資料大観』第6巻
弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品 小学館
- 梅原末治 1927『銅鐸の研究』資料篇・図録篇 大岡山書店
- 加藤安信 2001「東三河出土の銅鐸2例」
『愛知県史研究』第5号
- 栗原雅也 2002「都田川流域の銅鐸群に関する覚書」
『銅鐸祭祀の終焉－近江と遠江－』野洲町立歴史民俗資料館
- 桑原久男 1995「弥生時代における青銅器の副葬と埋納」
『古墳文化とその伝統』金関恕・置田雅昭編 勉誠社
- 佐原 眞 1960「銅鐸の铸造」『世界考古学体系』第2巻
日本Ⅱ 弥生時代 平凡社
- 佐原 眞 1960「銅鐸文化圏」
『図説世界文化史大系』20 角川書店
- 佐原 眞 1964「銅鐸」『日本原始美術』4 青銅器 講談社
- 佐原 眞 1974『古代史発掘』5 大陸文化と青銅器 講談社
- 佐原 眞 1976「銅鐸型式分類の研究史（上・下）」
『考古学雑誌』第53巻第2・3号
- 佐原 眞 1979『日本の原始美術』7 銅鐸 講談社
- 佐原 眞・笠井敏光 1979『西浦銅鐸』
羽曳野市埋蔵文化財調査報告書1 羽曳野市教育委員会
- 佐原 眞・町田 章 1968「和歌山市有本出土銅鐸」
『和歌山県文化財学術調査報告書』第3冊
- 進藤 武 1995「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」
『古代文化』第47巻10号 古代学協会
- 進藤 武 1999「銅鐸祭祀の終焉－多数埋納・破砕破棄－」
『滋賀考古』第21号 滋賀考古学研究会
- 進藤 武 2002「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」
『銅鐸から描く弥生時代』佐原眞・金関恕編 学生社
- 進藤 武 2004「三遠式銅鐸の成立と解体」
『第11回東海考古学フォーラム 伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題 山中式の成立と解体』
第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 菅原康夫・藤川智之・植地岳彦 2011「三好市西祖谷山村
榎鉾神社所蔵の銅鐸－榎銅鐸」
『真朱』第9号 徳島県埋蔵文化財センター
- 田中 琢 1970「〈まつり〉から〈まつりごと〉へ」
『古代の日本』5 角川書店
- 田中 琢 1977『日本原始美術大系』4 鐸 剣 鏡 講談社
- 寺沢 薫 2010『青銅器のマツリと政治社会』吉川弘文館
- 中村光司 2000「高茶屋銅鐸観察ノート」
『津市埋蔵文化財センター年報』4
- 難波洋三 1986「銅鐸」
『弥生文化の研究6 道具と技術Ⅱ』雄山閣出版
- 難波洋三 1988「銅鐸の調査と工房復元」
『奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術者特別研修
生産遺跡調査課程』奈良国立文化財研究所
- 難波洋三 1991「同範銅鐸二例」
『辰馬考古資料館考古学研究紀要』2 辰馬考古資料館
- 難波洋三 1999「近年の銅鐸研究の動向」
『徹底討論 銅鐸と邪馬台国』サンライズ出版
- 難波洋三 2003「徳島市出土の特徴的な銅鐸について－亀山
型と名東型」『徳島市立考古資料館開館5周年記念シンポ
ジウム 銅鐸の謎をさぐる』徳島市立考古資料館
- 難波洋三 2005「銅鐸の埋納と破壊」『西側遺跡(I)』
豊橋市文化財調査報告書第82集 豊橋市教育委員会
- 難波洋三 2005「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸－最終段階の銅鐸
の動向－」『平成17年度文化財講座資料集 魏志倭人伝
の世界』(財)大阪府文化財センター
- 難波洋三 2006「近畿式・三遠式銅鐸の成立」『歴博国際シン
ポジウム 2006 古代アジアの青銅器文化と社会－起源・
年代・系譜・流通・儀礼－ 発表要旨集』国立歴史民俗
博物館
- 難波洋三 2007「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸－その成立と展開－」
『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』
平成15年度～18年度科学研究費補助金基礎研究(C)研究成
果報告書
- 難波洋三 2011「扁平鈕式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見
てくるもの』滋賀県立安土城考古博物館
平成23年度春季特別展図録 滋賀県立安土城考古博物館
- 難波洋三 2011「銅鐸群の変遷」『豊饒をもちらす響き 銅鐸』
大阪府立弥生文化博物館図録45 大阪府立弥生文化博物館
- 難波洋三 2012「銅鐸を使う国々」
『卑弥呼がいた時代 兵庫県立考古博物館開館5周年史跡
大中遺跡発見50周年記念シンポジウム資料集』兵庫県立
考古博物館
- 春成秀爾 1982「銅鐸祭祀の終焉」『歴史公論』8-4 雄山閣
- 春成秀爾 1982「銅鐸の時代」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 春成秀爾 1987「銅鐸のまつり」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集
- 春成秀爾編 2009『弥生青銅器コレクション』
国立歴史民俗博物館資料図録6 国立歴史民俗博物館
- 福永伸哉 1998「銅鐸から銅鏡へ」
『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 福永伸哉・近藤勝義 2014「突線鈕式銅鐸破砕プロセスの金
属工学的検討とその考古学的意義」纏向学研究センター
研究紀要『纏向学研究』第2号 桜井市纏向学研究センター
- 福永伸哉 2019「近畿弥生社会における銅鐸の役割」
『淡路島・松帆銅鐸と弥生社会』季刊考古学・別冊28
- 繭山順吉編 1966『欧米蒐蔵 日本美術図録』繭山龍泉堂
- 前田敬彦 1995「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」
『古代文化』第47巻第10号 古代学協会
- 三木文雄 1995『日本出土青銅器の研究』第一書房
- 三品彰英 1968「銅鐸小考」『朝鮮学報』第49輯
- 水野正好 1978「もう一つの銅鐸観」『日本歴史』367号

森岡秀人 2019「紀元前の弥生社会における最古の銅鐸埋納」
『淡路島・松帆銅鐸と弥生社会』季刊考古学別冊 28
森田 稔 2003「第4章 鑄型と鑄造技術」
『考古資料大観』第6巻
弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品 小学館
吉田 広 2001「朝日遺跡の青銅器生産」
『朝日遺跡VI』愛知県教育委員会
吉田 広 2014「弥生青銅器祭祀の展開と特質」
『国立歴史民族博物館研究報告』185 国立歴史民族博物館
和田晴吾 1986「金属器の生産と流通」
『岩波講座 日本考古学』3 生産と流通 岩波書店

図録等

東京国立博物館 1981
『東京国立博物館図版目録弥生遺物篇（金属器）』
蒲郡市郷土資料館 1981『三河の銅鐸』
大阪府立泉北考古資料館 1986『大阪府の銅鐸図録』
野洲町立歴史民俗資料館 1988『大岩山出土銅鐸図録』

協力機関一覧（順不同 敬称略）

あいち朝日遺跡ミュージアム、愛知県埋蔵文化財センター、
大阪府立弥生文化博物館、春日井市教育委員会、京都国立博
物館、宮内庁、国立歴史民俗博物館、桜井市教育委員会、桜
井市立埋蔵文化財センター、滋賀県、滋賀県立安土城考古博
物館、静岡県埋蔵文化財センター、島根県立古代出雲歴史博
物館、瑞雲寺、辰馬考古資料館、東京国立博物館、徳島県埋
蔵文化財センター、羽曳野市教育委員会、浜松市博物館、文
化庁、明治大学博物館、守山市教育委員会、守山市立埋蔵文
化財センター、栗東市教育委員会、栗東市出土文化財センター

辰馬考古資料館 1989『辰馬考古資料館展示図録』
明治大学考古学博物館 1990『明治大学考古学博物館案内展示図録』
愛知県清須貝殻山資料館 1991『愛知の銅鐸』
渥美町 1991『渥美町史 考古・民俗編』
神戸市立博物館 1993『銅鐸の世界－地の神への「いのり」』
国立歴史民俗博物館 1995『銅鐸の美』
野洲町立歴史民俗博物館 1996『銅鐸－埋納と終焉を考える－』
和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 1999『きのくにの銅鐸』
野洲市歴史民俗博物館 2002『銅鐸祭祀の終焉－近江と遠江－』
愛知県 2003『愛知県史 史料編2 考古2 弥生』
徳島県立博物館 2006『徳島の銅鐸』
浜松市博物館 2007『浜松市の銅鐸』
檀原考古学研究所附属博物館 2009『秋期特別展 銅鐸』
安土城考古博物館 2011『大岩山銅鐸から見えてくるもの』
大阪府立弥生文化博物館 2011『豊饒をもたらす響き銅鐸』
安土城考古博物館 2017
『青銅の鐸と武器－近江の弥生時代とその周辺－』安土城
考古博物館 2011

協力者一覧（順不同 敬称略）

青井有信、青木正幸、秋山浩三、浅田博造、雨森智美、有馬伸、
池口太智、石川敬子、伊庭功、岩崎茂、岩崎しのぶ、岡田滋、
片山葵、川嶋陶子、木村円香、久野正博、近藤順子、鈴木奈々、
武村英治、塚本浩司、津田悟、中川律子、難波洋三、橋本輝彦、
畑本政美、濱田恒志、原田幹、藤川智之、藤崎高志、増田浩太、
宮川禎一、三好孝一、村松一秀、森暢朗、吉田広

令和3年度 秋期企画展展示図録

大岩山銅鐸の形成

－近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の成立と終焉－

発行日 令和3年(2021)10月8日
編集・発行 野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）
〒520-2315 滋賀県野洲市辻町 57 番地 1
電話 077-587-4410
印刷 奥野印刷株式会社